
すべてを見せて。

広瀬亜紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すべてを見せて。

【Nコード】

N0283A

【作者名】

広瀬亜紀

【あらすじ】

中学生になった少年探偵団。同時に思春期をむかえていた。そんな光彦と哀ちゃんのドキドキ(?)な物語です。

中1の4月、よく晴れた月曜日。

中学生になった光彦は少年探偵団のみんなとクラス発表を見ていた。

「あーっあった！歩美とコナン君は3組！！」

「じゃあ俺達は？」

「元太君は僕といつしよの2組です！」

「私も2組ね・・・」

「はっ灰原さん！」

「わぁー！哀ちゃん制服似合ってる！！カワイイ！！！！」

「ありがとう」

「クラスもわかったことだし教室入ろうぜ」

「そっそそそうですね！」

コナンの言葉でみんなはそれぞれのクラスに入っていった。
動揺している光彦を残して。

「おーい！何やってんだ！？早くこいよ！」

「あっああ・・・ハイ！」

光彦は慌てながら教室に入り、そして席についた。

『となりは誰なんだろう・・・』

そう思っているとガタンと音をたて光彦のとなりに誰か座った。

「！！！！」

光彦は声にならない叫びを出した。

「あら・・・となりは円谷君なのね・・・よろしく」

「よっよろ・・・よろ・・・」

緊張して「よろしく」もうまく言えない光彦は足早に教室を出て行

った。

その姿をじつと哀が見ていた。

「コナン君！ちよつと！！」

光彦はとなりのクラスのコナンを呼び出した。

「なんだよ？」

「灰原さんと同じクラスなんです！しかもとなりの席なんです！！」
光彦はかなり顔が赤くなっていた。

「それがどうしたんだよ……」

コナンは困っている。

「だから……その……」

「！」

コナンは光彦の気持ちを察した。

「ああ……なるほどな（マセガキ……）。じゃあこの際、告白すれば？」

「それが……もうしたんですよ……」

「なっ！いつだよ！？（すっげえな）」

「卒業式の日……」

「そしたら！？」

「そついうのは苦手だからと……断られました……」

「あー……（だよな）。で？それを俺にどうしろと？」

「え？あ……そつですよ、無意味でした。じゃあ教室に戻ります……」

そつ言うつと光彦はすごくすごと帰っていった。

そしてドキドキしながらも光彦の中学生活はあっという間に過ぎていった。

中1の6月、梅雨のせいで毎日が雨だった。

光彦はその日、日直でクラスの掲示物を作っていた。

「ああーもう・・・やってもやってもおわりません・・・」

ブツブツ言いながら作業を進めていると誰か教室に入ってきた。

光彦は先生だと思い、顔も上げずに話し始めた。

「先生？あのー・・・僕一人じゃ、大変なんです。また明日にしてもいいですか？」

だが誰も返事をしない。

不安に思い、光彦が顔を上げると・・・

「大変そうね。手伝うわ。」

哀が立っていた。

「灰原さん！」

「クラスのみんなを紹介するのね・・・これはここに貼ればいいのかしら？」

「あつ・・・ああ、ハイ・・・」

光彦がそう言うとき哀はどんどんペースを進めていった。

半分ができたとき光彦が哀に話し掛けた。

「じゃあ、だいたいできたし先生に見せてきます！今日はありがとうございました！」

「いいのよ、じゃあね」

そう言うとき哀は教室を出ていった。

光彦は先生に掲示物を見せ、急いで昇降口へと向かった。

すると哀らしき人がそこで立っていた。

「あれ・・・？灰原・・・さん？」

光彦がそう言うとき哀がくるつと振り返った。

「あら・・・円谷君・・・さっきのアレ、先生に見せた？」

「ハイ！よく頑張ったって誉めてましたよ！」

「そう。よかったわ・・・」

「じゃあ僕帰ります！さよなら！」

「さよなら」

光彦は途中まで歩いたが急に立ち止まり哀の所まで戻っていった。

「・・・どうしたの？」

哀は少しびっくりした顔をして言った。

「あの・・・帰らないんですか？」

「ええ」

「どうして？」

「傘がないの。こんな雨じゃ帰れないわ」

哀は困ったように曇り空を見上げながらそう言った。

「それなら僕の傘を使って下さい！」

光彦はそう言うと哀に傘を差し出した。

「でも・・・」

「どうぞ！」

光彦は強引に傘を持たせ、そして走っていった。

（次の日）

「円谷君、これ・・・」

朝、哀は光彦に傘を返した。

「ああ！昨日はぬれませんでしたか？」

光彦は笑顔で傘を受け取った。

「ええ。そう言うあなたこそ大丈夫？」

「大丈夫ですよ！ピンピンしてます！」

「そう、よかった」

哀はそう言うと軽く微笑んだ。

その笑顔に光彦はドキッとしながらも席についた。

放課後、光彦は掃除を終えてまた昨日の掲示物の作成にはいった。
た。

昨日、哀が手伝ってくれたおかげで30分くらいで完成した。

「ふう・・・案外早く終わりました・・・」

光彦は完成した掲示物を貼り、出来具合を確かめた。
1人1人の写真を目で追いながら確認していく。

すると自分のとなりには大好きな彼女の顔があった。

「もう一度・・・もう一度だけ・・・告白してみようかな・・・」

光彦はそう言うのと近くにあったシャーペンで自分と彼女を大きなハートで囲った。

すると突然、先生が教室に入ってきた。

「あっ！完成したのね～！上出来だわ～！」

「せつ先生～！」

びっくりした光彦は急いでそのハートを消した。

「光彦さんをお願いして正解だったわ！じゃあもう帰っていいわよ

！」

「でも片付けがあるので・・・」

「そう？じゃあ気を付けて帰るのよ！さようなら！」

「さようなら・・・」

先生は教室を出て行った。

「はあ・・・」

光彦は思わず、ためいきをついた。

「また次の日」

「うわーっすごい！」

「本当だ！これって教室の中だろ！？」

「ハイ、そうですよ！」

光彦はみんなに囲まれ、誉められていた。

そこへ哀が入ってきた。

「あら・・・完成したのね」

「灰原さん！おはようございます～！」

「おはよう、なかなかの出来ね」

「灰原さんが手伝ってくれたおかげですよ！」

光彦と哀が楽しげに話していると元太が大声をあげた。

「あーっ！なんだコレー！」

「え？ナニナニ！？」

みんなが掲示物の前に集まってきた。

「光彦と灰原のところ、ハートマークで囲って消した跡がある！」

「うそー！？付き合ってるのー！？」

みんな掲示物にくぎつけた。

光彦はかなり慌てていた。

なぜならその犯人は自分なのだから。

そこに、元太が更に追い討ちをかけた。

「俺、見たぞ！この前の放課後、光彦と灰原が仲良くコレ作ってる
ところ！」

「ええーやっぱり付き合ってるの！？」

みんなが2人を問い詰めてきた。

「ちがいますよ！なんでそんな勝手なこと言っんですか！？」

そう言うと光彦は元太に殴りかかった。

みんなびっくりして叫んでいる。

すると・・・

ピリッ！！！！！！

ものすごい音とともに掲示物がやぶれた。

「あっ！」

光彦と元太は同時に叫んだ。

すると哀が無言でスタスタと掲示物のところまで行き、全部きれいに直した。

「2人とも・・・仲直りして」

哀は真剣な眼差しで2人を見つめた。

「そうですね・・・ごめんなさい、元太君」

「いや、俺も悪かったよ」

2人が仲直りすると哀はいきなり赤ペンを持ち出した。

みんなが呆然と見ている中、哀は光彦と自分のところにハートマークを書いた。

「文句・・・あるかしら」

そう言うとき哀は無言で教室を出て行った。

「はっ灰原さん！」

その後を必死で光彦は追いかけた。

光彦はパシッと哀の手をつかむところ言った。

「あの・・・さっきのは・・・？」

「ごめんなさい・・・あんなことして・・・私じゃないみたい・・・」

「いえっ！あの・・・灰原さん・・・今こんなときにアレですけど・・・」

「あなたが好き」

「えっ！」

光彦はびっくりした。

「でも卒業式の日は・・・」

「あの時は・・・恥ずかしくて・・・それに何より、私に恋愛なんて似合わないもの・・・」

「そんなことないですよ！」

光彦はキツパリ否定した。

「でも・・・そしたら・・・あなたに私のいるんなところが・・・見えてしまうでしょう?」

「え? いろんなところって・・・?」

光彦は哀の言っている意味がわからなかった。

「醜いところとか・・・とにかくなんでも! すべてを見せるのが怖かったのよ・・・」

光彦はそんな哀が可愛くて、思わず抱きしめてしまった。

「円谷君!？」

哀はかなり動揺しているようだった。

でも光彦は気にせず、強く哀を抱きしめた。

「いいんです・・・いいんですよ! そんなところも全部、あなたなんですから!」

「でも・・・」

「気にしないで・・・すべてを見せて下さい・・・」

そう言うと光彦は哀の顔を見た。

哀は微笑んでいた。

ただど涙を流していた。

「えっ! すいません!? その・・・あの・・・」

哀は涙を拭いながら、静かにこう言った。

「ありがとう・・・」

くおまけ

その後の2人は・・・

「まったく！あなたたちは・・・せっかくうまくできたのに、もう一回作り直しですよ！！」

「すみません・・・」

あのハートマークのせいで先生にこっぴどく叱られていた。

(後書き)

作者より

初めて光彦さんと哀ちゃんのお話を書きました！

長かった・・・かな？普通・・・かな？

どっちだろう！？

あつタイトルの説明なんですけど！

あれは光彦さんの言葉なので最後に「。」をつけました！

・・・なんてどうでもいいですね（失笑）

とにかく感想まっています！では短いですがさようなら

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0283a/>

すべてを見せて。

2010年10月22日02時30分発行